

「みどりの大地 青い地球をいつまでも」 馬場 弘融 東京都日野市長

ご紹介いただきました、東京都日野市の市長をしております馬場弘融と申します。

こういう場でお話ができる大変ありがたく思っています。時間が25分ほどでございますので、多分箇条書き的にとんとんといろいろなことを、機関銃のようにお話をすることになろうかと思いましたが、少しでも皆様の参考になればいいなというふうに思います。どうぞよろしくお付き合いをいただきたいと思えます。

初めに、東京都というと地方の多くの皆さんは、23区だけが東京都であって、多摩地域なんてなんだろうとお思いの方も結構いらっしゃるかもしれません。私どもの日野市は、23区ではなくて西の方にずっと広がっておりまして、多摩川という川に沿って広がっている立川というまちがありますけれども、その隣の日野というまちでございます。

人口が17万5,000人ほどおります。JR中央線が通っております。あるいは京王線という私鉄も通っています。首都圏の住宅都市であるとともに、例えば日野自動車の本社がある等々工業都市でもあります。昨今非常に不況ですが、製造品出荷額では23区も含めて東京都で一番の工業都市であります。

また、多摩動物公園という東京都の動物園がございます。それから、新選組の土方歳三が生まれていたり、あるいは井上源三郎が生まれていたりして、「新選組のふるさと」としてもPRをしているところです。

多摩川、それから、支流は浅川がございますので、環境に優しい配慮した市政をずっとずっと継続をしているところであります。それを原点として申し上げておきたいと思えます。

今日、私がお話し申し上げますのは、「みどりの大地 青い地球をいつまでも」、これをキーワードとして私はずっと使い続けているんですが、その中で2つの政策についてお話をします。

一つは、「ふだん着でCO₂をへらそう」という事業、もう一つは、「都市農業を守ろう」という事業です。順次お話し申し上げます。

①まず「ふだん着でCO₂をへらそう」という事業であります。日野市全体のCO₂の排出量、基準が1990年でございますので、2005年と比べてみたグラフです。一番下にあるのが産業部門、要するにメーカーです。これはかなり頑張っているんです。マイナスじゃありませんけれども、結構頑張っています。

2番目が家庭部門。これが努力していなくてかなり増えている。増える量が一番多いんです。

次が業務部門、これは市役所等です。その次が運輸部門、流通関係です。基本的には産業部門は結構頑張っているんですが、家庭、業務、それから、運輸部門がちょっと努力が足りないという、これが日野市のパターンです。

そこで、まず一番CO₂が増えてしまった家庭へどうやって入り込むかということになると、やはり基礎自治体の役割が一番大きいだろうということで家庭に入り込むことにいたしました。

基本的には、まず平成20年からでありますけれども、特に法人会の方々がちょうどこの時期に、やはりCO₂をへらそうという事業を全国展開で始めるところでありまして、法人会の皆さんと協力をし合って、ともかく数多くの市民を巻き込んで実行委員会をつくろうということで、メーカーから労働組合から機関、いろいろな団体すべてを入れ込んで、さらに大きな「ふだん着でCO₂をへらそう」実行委員会をつくりました。

その前に「ふだん着」という「ふだん」というのを平仮名にして、「着」だけは漢字になりました。2つの意味が資料の下のほうにありますけれども、ふだん着の「普段」と、絶えることなくの「不断」、両方にかけてやるという意味で平仮名にさせていただきました。資料にも書いてありますが、肩ひじを絶対張る必要はない。決して無理をすることはない。ただ一人ひとりが毎日、地道にこつこつと、途絶えることなく継続してもらうんだ、こういうことで事業をスタートさせたところであります。

大体5年間ぐらいでやろうということで計画を立てまして、日野市内には7万5,000世帯ございます。5年間で半分の世帯に宣言を出してもらおうというふうな仕掛けにいたしました。宣言書を書いてもらうということです。事業所が今5,000ほどあります。これも約半分、2,500の事業所にこの宣言をしてもらおうということで始めました。

子供からの声というのはとても大事です。そんなことで、「ふだん着でCO₂をへらそう」という事業について子供の協力をいただこうということで標語の募集をいたしました。これは表彰式の写真ですが、キャッチフレーズ最優秀賞が「みんなで地球を助けよう！」ということで、これを使ったポスターやチラシを数多くつくらせていただいています。

宣言をするということでございますが、どういう形でやったかというのがちょっと見えにくいかもしれませんが、資料にあるような案内書を家庭版と事業版それぞれつくりました。これをPRいたしまして、どういうことを具体的にやっていただくかということですが、本当に何げないことばかりです。

人のいない部屋ではこまめに照明を消す。あるいは身近な緑（植物）を一つでも増やす。一家団らんを毎日1回はやろう。それから、車を発進する時にはゆったりとした発進をしよう。

こまめに水を止めよう。マイバックを利用しよう。食材はできるだけ近くで買おう等々、例えばこういう取組が書いてあるわけでありまして、どれか1つでも継続してやりますよという人は、丸を付けてもらって出してもらっています。下のほうには自分で特別こういうことだけはやっている、あるいはやりたいという方については、書いていただくというふうな形にさせていただいております。ともかくだれでもできることを、継続してやってもらおうということが基本でございます。

できるだけ大勢の市民の皆様にPRをして、参加をしていただかなければいけないということで、この写真は産業祭等のイベントだと思いますが、それぞれのイベントで担当部署だけではなくて市民のボランティアも含めて、「これをやってください」というふうなことでPRをさせていただいております。

市の広報、毎月1日と15日に出すんですが、この広報の一番下のところに「ふだん着でCO₂をへらそう」宣言世帯が今何世帯かと、これは2月の15日なので1万5,701世帯今宣言をもらっていますというようなことを、毎回広報でPRをさせていただいているところでございます。

これについては、成果というところとちょっと言葉は違うと思うんです。実際に宣言はしたけれども、やっているかどうかはまだチェックができておりません。ですからこれは成果というよりも、これだけの世帯から宣言をいただいて、その取組がちゃんと行われていると仮定をした場合でありますけれども、約7,461トンのCO₂が減っていると、こういう状況です。よく言いますけれども、針葉樹1本が1年間で約14キログラムのCO₂を吸収すると仮定すれば、世帯平均で約34本分吸収するCO₂量を削減できたし、光熱水費で見れば世帯平均で年間約2万5,000円何がしの節約になったはずですよというふうなことを、常々公表をさせていただいているところでございます。

なぜこのCO₂をへらそう事業に一生懸命取り組んだかということになりますと、これは実はちょっと前の話ですけれども、平成12年の時に私どもの日野市は、ごみの排出量が近隣で一番多かった。リサイクルが一番悪かった。ワースト1だったんです。ごみの改革というふうに私どもは言いましたけれども、ダストボックスという鋼鉄製のボックスが市内に7,000個もありまして、そこに市民の皆さんどんどんお捨てくださいと、あとは全部行政が集めますからというパターンでずっとやってきたわけです。これを劇的に変えて有料にしました。個別収集にしました。リサイクル品も何も全部自宅まで取りに行くというような形にしたわけです。おかげさまでごみは半分に減って今は10年ほどたちますけれども、リバウンドをしないで頑張っ

います。

あわせてISO14001もその時に取って、何度か更新をして今も継続していますが、その時にこれはもうごみだけの問題じゃないぞ、生活全般を我々一人ひとりが見直しをしないと、地球を壊しちゃうんじゃないかという認識を私どもは持ちました。

そんなことでこのCO₂をへらそうという事業に、先ほど最初のグラフで申し上げましたように家庭が一番だめなんだ、理屈ではみんなやりましょうと言うけれども、実際家に帰ってみると水は垂れ流し、テレビはつけっ放しになっているわけでありまして、それを何とかせにゃいかんというので、この事業を始めさせていただいたわけでありまして。

最後のところですが、つくづく思うのは、現代都市文明は根本的に反省しなきゃいけない時期に来ているというのが、私の正直な印象であります。実は私どもの日野市はもともと甲州街道の宿場町、小さな日野という宿場があったわけですが、そこが低いところにありまして、高台のほうから見おろした写真があるんです。100年前の写真と50年前の写真と今撮った写真と3枚あります。100年前の写真と50年前の写真はほとんど変わりません。変わっているのは新しい甲州街道の日野橋というのができたのと、電車が走ったといったそのことだけでありまして、あとは宿場の様子も木の様子もほとんど変わらない。ところが、50年前と今とを比べると全く違います。ビルがわーっと建って、もともとの農地とか家なんてかすかにしか見えないという状況になっています。

確かにこの50年というのはとても便利になりました。テレビはできた、車はできた、パソコンもある。とても便利にはなったけれども、果たしてこれでよかったのかということでありまして。この辺のところを反省しなくてはいけない。豊かさ・便利さを求め過ぎた。あるいは石油を燃やし過ぎた。自然を本当に壊してしまったというふうに改めて思うわけでありまして、そういう意味で、今はやりの言葉を使いますと、私自身もそうですけれども、「メタボリックシンドローム」というのが文面によく出てくるわけですが、文明がまさに「メタボリックシンドローム」に陥っている。

これはみんなが考えてもっとスリムな体にしていかなければいけないだろう、それにはやはり企業がやればいいのか、国がやればいいのかじゃないだろう、一人ひとりが毎日やってみようよということにならざるを得ないということで、これは継続をしてやっていきたいというふうに思っておるところでございます。

これからの課題は、先ほど申し上げましたようにまだチェックが十分ではありません。宣言はしたけれども、実際にそれが行われているかどうかということ、きちんとチェックをしな

ければいけないので、この5年間でまとめる時には、それぞれのご家庭とやりとりをして、実際どれだけの効果が上がっているか、実際にCO₂がどれだけ日野では減っているかというようなことが、発達できればいいなというふうに思います。

息の長い取組だし、一人ひとりが毎日やらなきゃいけないことだから大変です。よく言われるようにマイナス面ばかりですから、引く計算ばかりですからこれじゃ意欲が出ないよという方がいるかもしれないけれども、だけれども、我々は今の文明のあり方というものを根本的に反省する必要があるということで、継続をしてやっていきたいというふうに思っています。

②次に都市農業を守ろうというお話をします。この資料は、日野市の農業の現状です。本当に数少ない農家の方しか農業をやっていません。農家の数は371軒、1,425人しか農業をやっていません。けれども、農業あるいは農地が、首都圏の近郊にはどれだけ大事かということを変更して見直そうということで、平成10年に農業基本条例というものをつくりました。

これは東京のようにあまり農業をやっていないところで、何で農業の基本条例か、なんてことを言われたこともありましたけれども、今考えると非常によかったと思っています。都会でも農地は大事だと、これ以上農業を減らしちゃだめですよと、それには市民も責任があるし行政も責任があると、業としての農業を都会でも継続できるように、市も消費者も支援していこうというような形の条例でありました。

アクションプランというのをつくりまして、今前期のアクションプランがようやく終わってこれから後期にかかるところです。どういうことをやったかということ、安心して農業ができる環境づくりとか、担い手とか、交流とか、「日野ブランド」とか、食育をやろうとか、そういうことを市民も交えてやらせていただいているところでございます。

その中で2つだけ申し上げます。1つは、援農市民養成講座「農の学校」というのを起こしております。農業をやりたいという特に団塊の世代の方と、最近では若いお母さんが結構関心をお持ちであります。土に親しみたいということでこういう方々を1年間、この1年間がなかなか難しいんですが、行政は4月から3月が年度ですね。農業というのは1月に始めなければだめなので、2年度にまたがります。なかなか難しいわけでありましてけれども、これを1年間継続をして「農の学校」をやらせていただいております。もう既にOBの方々がかなり的人数になりまして、その方々が実際に何軒かの農家で働くというような状況にもなっています。

もう1つ、学校給食です。市内に25の小・中学校があります。日野ではセンター方式ではなくて各学校ごとに調理所があります。自校方式といいます。初めはこれを全部市の職員でやっていたんですが、私の代になりましてどんどん民間委託をいたしまして、調理員はほとんど

民間の方々をお願いをしています。

ここに日野産の野菜をできるだけ使おうということでもあります。きっかけは生徒が農業とか畑のことを全然知らないから地域の畑を荒らして困ると、何とかわかってもらいたい。もう一つは給食の食べ残しが多過ぎると、これにはやはり大事な野菜を、「あのおじさんがつくっているんだ」ということをやっていこうということで、地元の野菜は必ず入れるようにしています。生産者の顔が見える地元の野菜を供給をしていくと。現在は25校が使っています。

平成20年度の利用率は、購入価格のベースですけれども、安いですから18.8%ではありますが、これを何とか30%ぐらいまで地元の農家がつくった野菜を使おうということで努力をしています。課題は、小量なものですから農家の方が手間がかかるわけです。あと支払いの関係とか手間がかかる。そこでコーディネーターを配置しまして、何とか形の悪いものでもいつでも買い上げるからやってほしいということで、今何とか量を増やすように努力をさせていただいているところでございます。

さて、それで都市農地というのは、単なる農業振興を超えています。先ほども武内会長のお話がありました。里山というふうに里をもう一回つくり返すといいですか、そういうことが必要だろう。里づくりに農地は絶対必要です。

日野はもともと私が中学生ぐらいの時まで、昭和30年代まで日野の駅はやや高台にありまして、見ますと当時は「八丁田んぼ」と言ったんですけれども、駅から見ずっと水田がつながっていました。多摩で一番の米どころでありました。そこが全部ある時から住宅予定地になり、ほぼ住宅に変わってきたわけです。これ以上農地をなくしてしまうと都会としての、あるいはまちとしての潤いがなくなるということでもありますし、先ほどもお話がありましたように防災面でもゆゆしきことになるということでもあります。

加えてもともと水田がたくさんありましたから、農業用水が今でも市内を縦横に流れておりまして、百十何キロあります。東京都下では一番残っています。それをもう一度復元させて親水空間をつくるとか、そういうことが必要だと、それには農業、農地がこれ以上減ってはいけないということで、農業を末永く見守っていきたいというふうに思います。

防災に限らず教育面、あるいは最近土に触れるということで農業福祉という言葉も出てきております。そういうことも含めてもっと増やす、減らさないで努力をしていきたいというふうに思っています。日野市でもまだ写真のようなところがあるんです。こういう景観というものを、絶対人の住まいのそばには置いておかなければいけないだろうというのが我々の感覚であります。

もう一度2つの取組を申し上げます。我々は現代都市文明への根本的な反省をするべき時期にきている。この50年間我々は、便利さとか物質的な豊かさを求め過ぎてまちを壊し過ぎた、あるいは地域を壊し過ぎたというふうに思っています。それを直すには一人ひとりが毎日、日々の生活の中で変えていくしかないということが1つ。江戸時代を思い起こせということでもあります。

それから、もう1つは「みどりの大地 青い地球をいつまでも」ということで、ここにお集まりの皆さんほとんどが昭和世代だと思うんですけども、昭和世代の責任です。昭和世代が今のままで次の世代に、「これはおれたちがつくった遺産だよ」と渡して恥ずかしくないのかと、私は非常に恥ずかしく思います。もっと地球をきれいにして、日本をきれいにして平成の世代に受け継がせたいというふうに私は思っています。すごく大変な事業だというふうには思っていますけれども、一人ひとりがCO₂のことも含めて、私ども日野市は皆さんのお知恵をいただきながらやっていきたいというふうに思っています。御清聴ありがとうございました。